

北の森の動物たちの今 (3)

キタキツネ：少なかった昔，普通の今

ひら かわ ひろ ふみ うら ぐち こう じ
平 川 浩 文 ・ 浦 口 宏 二
(森林総合研究所北海道支所・北海道立衛生研究所)

キタキツネは北海道の在来種。今では普通に見かけるが、そうでなかった昔もある。ユキウサギに続いて狩猟統計を手がかりに、その戦後の歩みを振り返ってみたい(図1)。

1965年まで戦後20年間の捕獲はほぼ全数が一般狩猟による。この間、1954年から1961年まで捕獲数は年500頭を下回り、その前後と比較して低い水準にある。その後やや持ち直した捕獲数は1960年代後半に入ると増加傾向が明確となり、それまでなしに等しかった有害駆除による捕獲数も1966年には2桁、1972年には3桁となる伸びを見せる。両者とも1970年代には大きな増加を続けたが、一般狩猟による捕獲は1982年の10473頭をピークに今日まで減少が続く。一方、有害駆除による捕獲数は停滞と急増を繰り返しながら伸び続けて1995年に7347頭に達したが、その後、停滞を挟んで2000年までの2年間にその半数以下の3347頭まで急減。それから約5年の停滞を経て、今日まで再び増加傾向にある。最新統計(2014年)は一般狩猟637頭、有害駆除6510頭だ。

まず気になるのは、1950年代後半の捕獲数の落ち込み。同時期のユキウサギ捕獲数の変化と正反対の動きだからだ。

狩猟者数の影響を除いた「狩猟者1人あたりの捕獲数(図1でCPH)」は1953年から1954年にかけて急落しており、捕獲数の低下はキツネ生息数急減の結果である可能性が高い。

その原因として疑われるのが殺鼠剤フラトールだ。当時、拡大造林政策で大規模な伐採と植栽が

進む中、問題となったのがネズミ害。その対策に使われたものだが、これで死んだネズミを食べたキツネも死亡する強い毒性があった。この頃学生だった元北大教授、阿部永さんはサロベツで初めてキツネを見てとても喜んだとのお話を伺ったことがある。1960年代後半以降の捕獲数増加はフラトール出荷量減少に呼応しており、生息数回復の結果とみられる。

1970年代以降の有害駆除数増加は当初、農業被害が主な理由だったが、のちにエキノコックス対策による駆除も増えてくる。エキノコックスはイヌ科動物を終宿主、ネズミを中間宿主とする寄生虫で、人も感染するため、その媒介動物としてキツネ駆除が進められるからだ。

一般狩猟による捕獲数が1980年代以降減少した背景には毛皮価格の下落が考えられる。毛皮はこの頃から海外からの大量輸入で供給増となり、それまで1頭1万円以上した毛皮価格が一挙に3千円程度に下がったとされる。1984年には国際的な環境保護団体グリーンピースが反毛皮キャンペーンを開始したことも影響したかもしれない。

農業被害による駆除数からみて戦後のキツネ数のピークは1990年代半ば。その数は今世紀初めにかけて疥癬(皮膚病)の流行でかなり減少したが、現在は流行前の水準に戻りつつあるとみられる。

引用文献

財北海道森林保全協会. 1988. 40年のあゆみー創立40周年記念誌.

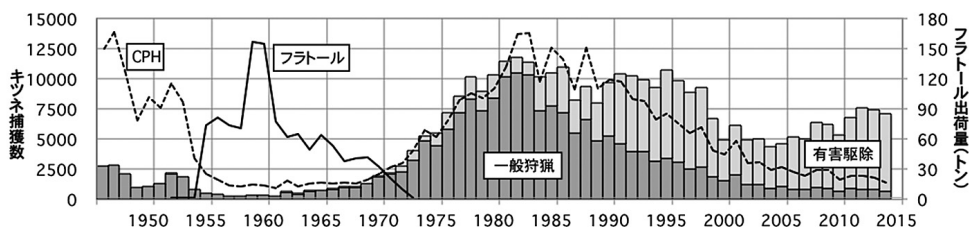


図1. キツネ捕獲数、フラトール出荷量*、狩猟者一人あたりの捕獲数(CPH)の推移(*北海道森林保全協会1988)